

平和

HIROSHIMA PEACE FILM FESTIVAL SINCE 2005

2007.8.17 **FRI** - 26 **SUN**

第2回

ヒロシマ平和映画祭
2007 Guide Book

『Pawns of The King』

1953/日教組プロ/白黒/104分/関川秀雄

妻に先立たれたカズオは、娘の勧めで彼女が暮らすアメリカにやってきた。彼は立ち寄った公園でチェスに興じる日系人とおぼしき年老いた四人の男たちに出会う。誘われるままにチェスを始めるカズオ。しかし相手は「昔の敵」であった……。画家になる夢を諦め帝国海軍で零戦パイロットになったカズオ。野球選手になる夢を諦め、祖国アメリカへの忠誠心を示すために日系人だけで編成された第422部隊に志願したチャーリー。太平洋戦争の英雄

とアメリカの歴史上もっとも多くの勲章を授与された部隊。チェスの対戦とともに、彼らは自分たちの過去に対峙することを迫られる。国家という王(King)の駒(Pawn)として戦争に身を投じた二人のチェス対戦を中心に、彼らの距離が縮まっていく様子が静かに描かれる。老年期を迎え、妻にも先立たれた孤独な二人。王の駒の言葉が、歴史をもった一人の人間の言葉としてわたしたちの胸を打つ。(上村 崇)

『二十万の亡霊 (200000 phantoms)』

2007/カラー/10分/ジャン＝ガブリエル・ペリオ

ヘリオ監督 舞台挨拶アリ



原爆ドームとその周辺の600枚近くにも及ぶスチール写真を、戦前から現在にいたるまで走馬灯のようにコマ撮りで積み重ねる、フランスの映像作家・ペリオ氏渾身の小編。

原爆の惨禍を示す原爆ドームは平和の理念とともに多くの人に語られてきた。しかし原爆ドーム自体は黙して何も語らない。積み重ねられる原爆ドームの映像を観ていると、原爆ドームが単なる建造物であることを越え、現在までのヒロシマを見守り続けてきた生証人であるか

のように思えてくる。さらに映像を観続けていくと、映像を観ているわたしたち自身が逆に原爆ドームに「観られている」ような錯覚さえ覚える。黙して語りぬ原爆ドーム。投げかけられたその視線にわたしたちはどのように応答すべきであろうか。圧倒的な存在感をもつこの建造物と対話することをわたしたちは強いられるのだ。映像を観た一人一人が自分自身の言葉を探ることが求められることになるだろう。(上村 崇)

記憶の喚起と形成—ヒロシマの過去からHiroshimasの未来へ

記憶の喚起／形成

「ぼくは、原爆の恐ろしさと、あの非人道的なことを、世界の人たちに叫ぶ前に、まず日本人にわかってもらいたいです。いえ、それよりか、広島の人たちに知ってもらいたい。もっとはっきり言えば、ここにいるこのクラスの人たちに、先生によく知ってもらいたいです。」

映画「ひろしま」より

広島／原爆投下の忘却

この言葉は、映画「ひろしま」で、原爆に無関心な生徒に向かってある生徒が発した言葉です。映画「ひろしま」はさまざまな見方や解釈があると思いますが、この言葉はわたしたちが平和を語るスタイルの一つを提示してくれていると思います。映画のなかには、平和公園で大人たちに「商品」を売りつけようとする子どもたちが出てきます。「裕福な」身なりをした大人たちは、戦中の遺物を見るかのように彼らと目を合わさず去っていきます。原爆投下の忘却。戦争体験の忘却。そのうえで語られる空疎な平和の理念。終戦から8年の歳月を経て制作された映画に、戦後60余年経った今日に通じる問題が描写されていることに驚きました。

この忘却を確認した上でシンポジウムをはじめめることは意義があると思います。今回のシンポジウムでは、それぞれの立場から平和活動や平和をテーマに作品を作ってもらった方にパネリストとして集まってもらっています。この映画を皮切りに過去の広島をどのように捉えるのかみなさんの想いを語ってもらいましょう。世代や国籍も違うパネリストの語りは、広島を多角的にみることを可能としてくれるでしょう。それは、それぞれの立場からそれぞれのスタイルで過去の広島を語り直す作業だといえるでしょう。

hiroshimasの未来へ

過去を振り返り、記憶を形成することは、歴史認識を確定したり各自がもつ歴史観の相違を際立たせるためではありません。むしろ、ヒロシマの現在を照射し、世界のhiroshimasを語るスタイルを模索することです。映画「ひろしま」のラストは、原爆ドームに生者だけではなく死者も集う場面で終わります。このシンポジウムが、原爆ドームのように過去と現在、そして未来を結びつける場であることを願います。

(上村 崇)



『二十万の亡霊 (200000 phantoms)』より